［巻頭インタビュー］
「自治の顔」

越前坂井辛み蕎麦「あなたの蕎麦で辛み隊」
9月に三国でB-1グランプリ大会

今年9月に坂井市の三国で、全国的に名高いB-1グランプリ大会が開かれると聞き、その仕掛け人として活躍中の「あなたの蕎麦で辛み隊」初代隊長の後藤寿和（ごとうとしかず）さんにインタビューしました。

商工会青年部で盛り上がり、志士の思いで坂井を変えたい

―「あなたの蕎麦で辛み隊」の設立の経緯とネーミングの由来を教えてください。

後藤　きっかけは商工会青年部で集まった際、参加者から、「B-1グランプリってあるけど、出るとおもしろいんじゃないか」という意見が出ました。話し合う中で、ご当地グルメのおろし蕎麦を活かすというアイデアに行き着きました。青年部でやったら絶対に盛り上がると思いました。

青年部の会員91名全員が隊員で平成23年に結成して5年になります。イベントなどでの中心メンバーは12～13名。私は塗装業だが、印刷業、左官業、建具屋、鉄工業など皆の職業は幅広いです。

ネーミングは、立ち上げる際に皆で考えました。B-1グランプリに出ている団体は、ネーミング自体がおもしろいです。一度聞くと忘れられないような名前です。例えば、「甲府鳥もつ隊（皆の縁をとりもつ）」や「豊川いなり寿司で豊川市をもりあげ隊」など。私たちの「あなたの蕎麦で辛み隊」は、「あなたの蕎麦」に「あなたの傍」を掛け、「辛み」に「絡み」を掛けています。「辛み」には、地域の人たち、全国の人たちと辛み（絡み）たいとの思いを込めました。人と絡むことで、地域おこしに繋がります。蕎麦屋さんだけの団体だともっと堅いネーミングになっていたかもしれません。若い青年部ゆえのおもしろいネーミングになった気がします。

―隊長は時代劇のサムライの衣装ですが、特別のコンセプトが込められているのですか。

後藤　まずは注目を浴びることが大事だと思いました。例えば、「甲府鳥もつ隊」はゆるキャラを作り、優勝経験のある「厚木シロココロホルモン探検隊」は甲冑が衣装になっています。自分たちの衣装を考えていたときNHK大河ドラマで「龍馬伝」が放映されていました。蕎麦は江戸時代には食べられていたと聞いていたので、「侍」が良いのではないかということになりました。

幕末には名もなき志士たちが日本を変えるために活躍しました。私たちも坂井を変えたい思いがありました。「辛み隊」の名前は、新撰組や海援隊のイメージにも似ていて違和感なく覚えてもらいやすい気がしました。名もなき侍が坂井市、ひいては福井県、全国を走りまわろうというコンセプトを込めたものです。

侍の着物衣装は商工会の呉服屋さんにお願いして作ってもらいました。格好良くてお気に入りで評判も良いです。侍の衣装は2着ですが、イベント用のユニフォームとして動きやすくて目立つ衣装もあります。こちらは地元の三国高校の先生から打診があり家政科とコラボして作りました。最初にプレゼンをしてもらい、商工会青年部の仲間と一緒に選びました。辛み蕎麦に使う大根の色をイメージして、白い上着と緑のズボンになっています。30着作ってもらいました。

高校生デザインの衣裳

三国高校の家政科は、現在は坂井高校の生活デザイン科に移りましたが、その関係は引き継がれています。また、坂井高校の農業科には大根や蕎麦の実を作ってもらって、辛み隊メンバーの製麺所で使わせてもらう取組みもおこなっています。

「辛み蕎麦」には大根おろしがなく、しぼり汁だけの辛み

―「辛み蕎麦」と「おろし蕎麦」はどこが違うのですか。辛み蕎麦というネーミングは、坂井市内では統一されているのですか。

後藤　辛み蕎麦は、大根をおろした絞り汁と出汁（だし）と絡めて食べます。B－1グランプリは創作料理がNGなんです。たとえ地産地消でも新作料理もダメなんです。昔から当たり前に食べられている食べ物であり、かつ、高価でなく、県外の人たちに珍しがられる食べ物でなければなりません。これがB－1グランプリの前提です。

B－1グランプリのBはB級のBではなく、BRANDのBです。その定義を勘違いしている人が多く、当初は「蕎麦はB級の食べ物じゃないぞ！」と言われました。坂井市と言えばカニがありますが、毎日食べるものではありません。辛み蕎麦は当たり前に食べられているものです。

私自身、以前、三国におろし蕎麦を食べに行って大根おろしがのっていなかったことに驚きました。春江ではのっているが、三国ではのっていません。これらの地域では、北前舟が栄えた時代、豪商が多かったことから贅沢な食べ方という言い伝えがあります。

福井のおろし蕎麦の食べ方には、3つの推奨する食べ方があります。蕎麦に大根おろしをのせ出汁をかけて食べる、大根おろしを混ぜた出汁を蕎麦にぶっかけて食べる、大根おろしの絞り汁のみを出汁とまぜて食べる、の三通りです。「辛み蕎麦」は絞り汁だけで大根おろしを入れない点が特徴なんです。

市内で辛み蕎麦を出していた店も、最初は「おろし蕎麦」と表現していました。それを統一して「辛み蕎麦」のネーミングとすることには抵抗がある店もありました。また、お客さんがオーダーする際、おろし蕎麦と辛み蕎麦があったら混乱するという問題がありました。「辛み隊」を結成するにあたり、蕎麦屋さんに迷惑をかけてはいけないと思いました。純粋に蕎麦を利用して坂井市をPRしたかったんです。とにかく辛み蕎麦を浸透させたい意向を伝え、お願いしてきました。お客さんが混乱しないようにメニューには、越前おろし蕎麦（辛み蕎麦）と記載してもらうなど配慮もしてもらいました。そうした経過の中で、辛み蕎麦を注文するお客さんも増えてきました。また、味の定義やレシピ的なものは一切作らず、お店独自の味、辛さなど各々の店の特色を尊重しました。お客さんに各店を食べ歩いて、味比べしてもらう相乗効果も期待しています。

B－1グランプリはグルメの大会ではなく、地域おこしのイベントなんですね。

―「R－12、R－15」と区分されているのは何ですか。

後藤　辛さがお店によって異なるのはすごくおもしろいので、それをどう伝えるべきかを考えました。R指定は映画を連想させるおもしろい発想です。R－12とR－15だったらR－15のほうが辛いんだろうなと目で伝わるようにしたかったんです。R－12でも意外と食べることができたから、次はR－15に挑戦しようとか。最初は、蕎麦屋さんに結構怒られました。イベントではピリッと辛いR－12を出しています。大根の辛さは季節によって変わり、夏大根は辛くて、冬大根は甘いです。普段のイベントでは「丸い辛味大根」は入れていません。辛さ的には小学生なら食べられるレベルです。

B－1グランプリへの出場は団体を設立して好きなことを実行しているだけではダメなんです。B－1グランプリは、グルメの方に注目が集まっているが本来はまちおこしの大会です。

だから、毎年、蕎麦を売っているだけではダメなんです。例えば、武藤敬司氏や桑田真澄氏を講師として招いて講演会をしたり、中学校の美術部を巻き込んでコラボタオルを作ったり…。売上は坂井市の教育委員会に寄附しています。

初の日本人プロレスラーは三国町出身のソラキチ・マツダ氏。武藤敬司氏もアメリカでの評価が高いです。彼らは日本から世界へ羽ばたいた人たちです。坂井市からイラストレーターを出そうという取組みも行っています。

B－1グランプリはこうした地域おこしの側面も兼ね備えていないと登録できません。ただ申し込

むだけではグランプリに参加できる団体に認定されません。

―B－1グランプリへの出場が多いと費用面など大変ですね。

後藤　初出場の豊川市の時は盛り上がりました。一昨年の郡山市は少しテンションが低かったので、昨年の十和田市は気持ちを入れて臨みました。「辛みちゃんお守り」というものをつくり、その裏に中学生の生徒が、坂井市の良いところやPRメッセージなどを書いてくれました。そのお守りを、来場したお客さんに配って回りました。

十和田大会開会式の様子

十和田大会の様子

B－1グランプリは、「箸」の重さ（客が食べた際の箸を美味しいと思った料理に投票する、その本数＝重さ）だけでなく、まちのPRの熱心さも審査対象となります。本当にPRしているか調査されます。

坂井高校の生徒が、手うちそばを打ち、三国高校の生徒はパネルで地元PRをするなど自分たちで地元の魅力を研究し、PR方法も考えてくれました。中高生が絡んでくれるなど十和田での活動は充実していたので入賞できると思いましたが、残念な結果に終わりました。

グランプリ大会は2日間開かれます。参加費や旅費などの費用は商工会と行政の補助、出店イベントの売上などから捻出しています。

―グランプリの出店数はどのくらいですか。辛み蕎麦についての反応はどうでしたか。

後藤　昨年は62の地域が出展しました。最近増えているので今後は支部大会に重点を置くそうです。B－1グランプリの本部に加盟すれば出展できますが、今は昔より審査が厳しいのが現状です。

以前は準加盟を経て半年から一年くらいで本加盟となりましたが、今はオブザーバーとして研修を受ければ準加盟となり、本加盟に辿り着くには、早くて三年かかります。本加盟になっても楽ではありません。またB－1グランプリで何かイベントをしなかったら準加盟に落とされます。そういう意味で、私たちは順調にきています。

昨年、バスの中で、一人の高校生が感激で言葉を詰まらせて泣きました。私自身は入賞できなくてへこんでいましたが、感激して泣いてもらえるほどの経験をさせてあげられて、すごく良かったと感じました。入賞以上に、高校生と活動を一緒にすることで、地元の良さに気づくことができ、皆で一緒になってものをつくっていけたことが良い経験になりました。人や地域と絡むという一つの目的が達成できたと思います。

グランプリでの「辛み蕎麦」の反応は良く、おいしいと言ってくれました。コテコテ系の食べ物が多いB－1の中でさっぱり系の食べ物は辛み蕎麦だけ。思ったほど辛くないという人の方が多いです。もし辛かったら、「蕎麦だけ食べて」と言っています。今年は三千食を作りました。豊川市のときは57万人のお客さんが来ました。県外のお客さんと話をしていておもしろいのは、「年越しそばとして、辛み蕎麦（所謂冷たい蕎麦）を食べている」と言うと、ほとんどの人が驚くということです。全国的には、おろし蕎麦というと温かいのが普通らしいです。

B－1グランプリ全国から20団体が参加

―今年は坂井市で大会があるそうですね。どれくらいの団体が参加しますか。

後藤　今年の9月24、25日に坂井市で東海北陸支部B－1グランプリ大会が開催されます。北陸では初めての開催で今までのB－1グランプリの内容に加え、「食べる」プラス「地元のPR」をしたいと思っています。

支部ブロックの16団体と、今までの全国グランプリで優勝したゲスト団体を加え、計20団体が参加を予定しています。辛み隊はホスト団体なので今回は投票対象外になります。

会場は、三国の文化未来館と坂井市商工会三国支所、旧森田銀行跡地の三箇所で、それぞれが商店街でつながっており、お客さんがまち歩きできるように設定しています。芝政やハートピア春江で開催すれば楽ですが、その場合、開催場所しかPRできず、一過性のものになります。B－1グランプリを通じて、まちの活性化を図るために商店街を歩いてもらうのが一番のねらいです。商店街の人たちにも自慢の商品を販売してもらって、まちのPRもしてもらいます。相乗効果を期待しています。

B－1グランプリはまちを活性化させるためのイベントなので、地域の特色をバンバン出していくお祭りのような形にもしたいです。去年の三国の海山里まつりでは、お客さんが賑やかにまち歩きをし、三国節を踊ってくれたり、三国高校の吹奏楽演奏もありました。

B－1グランプリを主催する実行委員会は行政、商工会、辛み隊、地域の人、まちおこしをしている団体などから成り、企画部会を立ち上げて運営しています。区長会の会長が今度のB－1グランプリの際、山車を出そうかと言ってくれています。地域の団体も地元が大好きな人ばかりで色々とおもてなしをしたいと言ってくれています。儲かれば良いと考えている人は一人もいません。みんなで坂井市のイベントを成功させたいと考えています。そのような人がたくさんいることがとても嬉しいです。

B－1グランプリの本部事務局が愛B（アイビー）リーグ。そこに所属している人たちが愛B（アイビー）リーガーと呼ばれます。北陸では以前、富山のコロッケがありましたが、今はなくなってしまいました。愛Bリーガーは今回、自分たちの食べ物やまちを売り込むことをとおして、坂井市を盛り上げたいと来てくれます。辛み隊もほかの地域に呼ばれた際には、坂井市のものを持ってその地域を盛り上げに行きます。

―行政の参加状況やグランプリ全体の財源はどうしていますか。

後藤　坂井市はすごく応援してくれています。市長をはじめ職員も積極的に応援し参加してくれています。出てもらう以上皆に楽しんでもらうのが一番です。楽しくて充実感があれば満足します。市で1，400万円の予算を付けていただきました。経済効果も目的の一つです。昨年の十和田大会の経済効果は四十数億円。富士宮焼きそばはB－1グランプリで有名になりましたが、その後の経済効果も含めると二百億円規模にのぼるそうです。B－1グランプリが終わった後にどのように地域活性化につなげるかが重要です。

B－1グランプリは、2日間のイベントですが残りの363日の間にどうやって坂井市に還元してもらうか、イベントが終わった後どう盛り上げるかが大事です。例えば坂井市に来てもらって蕎麦を食べ、あわら温泉に泊まり、湯けむり横丁で飲んで、永平寺、恐竜博物館を観光してもらうなど、福井県全体を巻き込みたいです。三国、あわら、金津のJC（青年会議所）とも連携して旧坂井郡全体として盛り上げたいとの想いがあります。

―今後の目標や抱負はいかがですか。

後藤　今年の支部大会を成功させて次は全国大会を誘致したいです。辛み隊として、絡んだものを源に坂井市を盛り上げたいです。勝山、武生、今庄にもおろし蕎麦がありますが、地域によって蕎麦の特色が違います。いろんな蕎麦がある中で訪れたお客さんが選択できるのがベストです。「福井＝蕎麦」。蕎麦は県全体のご当地グルメ。ご当地グルメを通じたまちおこしを盛り上げ成功させたいと思います。

以前、学校にボランティアのお願いをした際、喜んで参加させていただくという回答を頂き、「B－1グランプリを呼べたのはすごいね」と言ってもらいました。また、昨年は坂井高校の放送部の生徒が、B－1グランプリや三国の海山里まつりで、5分ほどの作品を作って全国コンクールまで行きました。取材の中で、一人の生徒さんがクローズアップされ、その子が、「辛み隊に入って、隊長になりたい」と言ってくれました。

5年もかかったのか、5年でここまで来れたのかは分かりませんが辛み隊が認めてもらえていることが嬉しいです。まちづくりは人づくり。人づくりから夢づくりへとつながります。この取材も含めて、毎日、絡んだ人たちが色んな場所で地元を底上げしてくれれば、それが、絡みの中での成果になると思っています。

（編集部）坂井、中西、伊藤